2017 年度　神戸大学大学院建築学専攻 / 建築学科計画系インターンシップ講演会
神戸建築学　第 42 回

［日時］
2017 年 10 月 20 日 (金)
［司会・進行］
遠藤秀平 (教授)

［担当学生］
大崎真幸　小林諒　佐野旭　田川美那海　中井修二　東美弦　松井智美
松田星斗　山本修大　山本雅則（M1）
中島安奈　松井優香 (B3) 横山舜　吉川文乃　Yoo Gyung Yang（B2）

空間を思考する ～現代における共同体論～

内田　樹　思想家 / 凱風館館長 / 神戸女学院大学名誉教授
光嶋　裕介　建築家 / 光嶋裕介建築設計事務所主宰 / 神戸大学客員准教授

講演会の内容

私は事前に内田先生の「街場の共同体論」を読み、先生が考える共同体についてイメージをつかんで講演を聞いた。人間は家族や学校、友達間など様々な共同体に所属しているが、現代では「一人でも生きられる社会」が標準化されており、「他者と共生する能力」を育てる努力を怠ってしまったため、人と人の関係性が変化してきているという。例えば学校では個人それぞれの良さを尊重しながら共に学ぶのではなく、普通と違う行いをするといじめられるからみんな同じ行動をする傾向にあり、また社会では周囲の人を頼ることは他者に迷惑をかけることになるため極力頼らずに一人で解決しようとする傾向にある。こうして共同体は破綻してきている。

しかし一方ではSNSの普及などによって2次元的な共同体は広がりを見せている。部屋に一人でいるプライベートな時間でもSNSで外部と繋がっていたり、一方でまちを歩いていたり満員電車に乗っていても誰も気にかけてくる人はいないという風にパブリックとプライベートの反転が起こっていると捉えることもできる。こんな社会において1番のプライバシーは頭の中にあると内田先生は対談で話していた。写真や生年月日など自分の情報をすぐに発信できるしパブリックとプライベートもあいまいになっている現代において、思想や意志は自分だけが持っているものであり、発信しなければ始まらないし、発信したものを受信してもらって初めて価値を得られるという。

また、建築家は空間にコンセプトや何十年後まで残るメッセージを込めるが、人々は空間を通すことで身体性でそれらを読み取り、自然の力や神など人間をはるかに超える存在に対して思いを巡らす。例えば神社では、手を打ち頭を下げ手を合わせるという行為や経験を通して、神社の向こう側のご神体や神という存在に対して内発的な畏れを身体的に表現している。内田先生は共同体の例として自身の道場を挙げ、「共同体とは常にだれに対しても開かれていて、中枢がなくても動くことが出来る」と述べている。その場所が持つ経験や記憶、経緯に対してそれぞれ空間に立つ人間が愛着を持ち、これら数値化できないものを共有し受け継ぐことで空間が共同体となるという。人は共に体を動かしたり、共通の空間体験や思い出を経験することで仲間意識が芽生え、共同体を作り上げることが出来るため、建築は共同体化を引き起こすきっかけになる可能性を持っているのではないかと私は考えた。

近年共同体が破綻してきている中で、シェアハウスや住み開きのように他者と生活を共有するスタイルやサードプレイスでの交流が増えていることについて街場の共同体論ではどう論ずるか気になったのだが、対談で内田先生が話していた「シェアハウスという共同体は成立しない」という考え方が衝撃的だった。シェアハウスは生活を共有することで利便性が高まるため成立するのであり、利便性が無くなると破綻してしまう。一方、共同体は先に述べたように数値化できない経験や学業や知識を次に受け継いでいくという、時間を貫く縦軸を持つため、利便性等に関係なく受け取る一人一人の身体が存在する限り破綻することはない。つまりシェアハウスは他者との共生であり、一見「一人でも生きられる社会」に反するものと見えるが、実際は利便性というお互いの利害一致によって成り立っている関係に過ぎず、昔ながらの持ち

光嶋　裕介 ｜ Koshima Yusuke

建築家/光嶋裕介建築設計事務所主宰/
神戸大学客員准教授

1979年 米ニュージャージー州生まれ。2002年 早稲田大学理工学部建築学科卒業。2004年 早稲田大学大学院修士課程建築学専攻修了。
2004-08年 ザウアブルッフ・ハットン・アーキテクツ（ベルリン）に勤務。2008年光嶋裕介建築設計事務所を開設。2016年神戸大学客員准教授。
主な作品に、《凱風館》(2011)、《旅人庵》(2015)など多数。主な著書に、『みんなの家。』(アルテスパブリッシング)、『建築武者修行』(イースト・プレス)、『建築という対話』(筑摩書房)など多数。

内田　樹 ｜ Uchida Tatsuru

思想家/凱風館館長/
神戸女学院大学名誉教授

1950年 東京都生まれ。1975年 東京大学文学部仏文科卒業。1982年 東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程中退。
専門はフランス現代思想、武道論、教育論、映画論など。
主な著書に、『ためらいの倫理学』、『下流思考』、『ぼくの住まい論』など多数。 『私家版・ユダヤ文化論』で小林秀雄賞受賞、『日本辺境論』で新書大賞受賞、著作全般に対して伊丹十三賞受賞。神戸市で武道と哲学のための学塾『凱風館』主宰。

つ持たれつやおせっかいで繋がっていた共同体とは全く異なる集団であるのだ。

例えば、実家のリビングを想像してみると、法令などに縛られない公共性を持ち、家族それぞれの思い出や共通の記憶が家具や部屋自体に含まれており、またリビングのソファに座るだけでそれらが思い出されたり、あるいはダイニングの席の割り振りが自然に決まっていたりする。ある程度の公共性を持ち、数値化できない経験や記憶とその対象物があり、身体性を誘発させるような空間に、その場を整えることが出来る人間と身体感受性で受け取ることのできる人間が存在することによって共同体というものは成立しているのではないかと思った。　（M1　東美弦）

講演会の企画・運営

私たち第42回神戸建築学実行委員会は、講演会の3ヶ月ほど前から準備を進めてきました。これまでの神戸建築学では著名な建築家・建築分野の研究者をゲストにお招きしておりましたが、今回は初めて建築分野以外の専門家の方のお話を伺う機会となりました。講演内容を企画するにあたり光嶋さんと打合せを行い、学生スタッフが一人一冊内田さんの著書を読み、建築的に解釈できる部分を引用しそれについて意見をまとめることにしました。光嶋さんと学生スタッフが集まりそれぞれの意見を共有する「読書会」という機会を設け、講演内容について話し合いをしました。内田さんの共同体のつくりかたから様々な人の集い方が学べるのではないか、いろんな共同体の中にある一人の自分のあり方を考えることができるのではないかという意見が出て、講演会のタイトルを「空間を思考する～現代における共同体論～」に決定しました。このようにして、「人間」のことを考える思想家・内田樹さんと「空間」から「人間」のことを考える建築家・光嶋裕介さんとの対談という今回の神戸建築学の骨組みを組み立てました。

また、同時に講演会当日の配布資料作りも進めました。今回特

にこだわったのは書評ページです。「思想」「街場シリーズ」「まわりと生きる」「学び」「日本」「凱風館について」の5つにジャンル分けをして学生スタッフによる内田さんの書評を載せました。当日聞きに来てくれる建築学生にも興味を持ってもらえるようにタイトルを工夫したり内田さんへの質問を書くことで講演会に主体的に参加するように促すなど工夫を凝らしました。また、内田さんと光嶋さんの関係や光嶋さんの建築作品を紹介するページも作成し充実した配布資料を作ることができました。

スタッフは学部2回生から修士1回生までいましたが、学年に関係なくみな同じレベルで思考をし、講演会をつくりあげることができました。以下、2回生の学生スタッフの所感を記しておきます。　(M1　田川美那海)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

事前準備では読書会を行いました。そこで建築学生として内田先生の本の解釈について議論できたことは新鮮で勉強になりました。中でも「日本辺境論」は特に刺激的な一冊でした。

（B2　横山舜）

今回、内田さんの本を建築的に解釈する読書会を通して、学年を超えて意見の交換が出来たのは貴重な体験でした。講演会では建築の専門家ではない視点から、空間と人間の振る舞いとの関係性やこれからの公共性についてお話し頂き、今後考えていくべき課題を発見できました。　（B2　吉川文乃）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊